家（チベ）の歴史を書く

はじめに

自分の親戚がどうやら「面白い」らしいことは知っていた。

私の父は在日コリアンの二世で、母は日本人だ。父は一〇人（早逝（そうせい）した人を含めると一一人）きょうだいの末っ子、母は一人っ子で、日本にやってきてから生まれたのは父だけだ。つまり、私には在日一世（日本に移住してきた第一世代）の伯父と伯母が九人（配偶者を含めると一八人）いる。伯父や伯母にはそれぞれ一人から四人の子がいる。彼らはほぼ全員が大阪に住んでいる。

彼らはもともと、済州島（チェジュド）の朝天面新村里（チョチョンミョンシンチョンリ）という村から来た（「面」とはおおよそ日本の行政区分で言うところの「村」に、「里」は「大字」に相当する）。済州島は朝鮮半島の西南沖にある火山の島で、旅行会社には「日本から一番近い海外リゾート」と宣伝されている。大きさはだいたい香川県と同じくらいで、島の中央には大韓民国で最も高い漢拏山（ハルラサン）がそびえている。風が強く、家々の周りには石垣が組まれ、青い海も大きな滝も、深く長い洞窟もある。ついでにサバとタチウオと豚肉がとてもおいしい。

在日コリアンとひとくちに言っても、いろいろな来歴や立場の人がいる。日本が朝鮮半島

を植民地にしていた時代に、様々な経緯で日本に移住してきた人々とその子孫や、戦後すぐに日本へ移住してきた人々（オールドカマー）、一九八〇年代後半から九〇年代初頭の出入国管理及び難民認定法の改正以後に入国・定住したいわゆるニューカマーも、このカテゴリーに含まれる。国籍も大韓民国だったり日本だったり、あるいは無国籍のままに置かれていたりする。[注1]

私が大学を卒業する頃まで、父の親戚たちは年に最低三回（正月・祖母の法事・祖父の法事）は集まっていた。いわゆる「祭祀（チェサ）」と言われるものだ。そこでは、伯父や伯母が口角泡を飛ばして、時に他人には理解できないような内容で争う。最終的には殴り合いになることも少なくなかった。

私が小学生の頃は、数年に一度、親戚で集まって済州島に住んでいる親戚を訪ね、墓参りと墓の草刈りをした。そのときの写真は、いまも実家にある。同じような顔と体型の人たちが五〇人くらい、山の中にある墓に行って草を刈り、そのあとで草を刈ったばかりの地面にゴザを敷いて法事をしてご馳走を食べる。

祖母の墓は山の中腹の、見晴らしのいい少し開けたところにあった。祖母の墓のすぐそばには背の高い松の木が生えていた。祖母はそこが好きだったらしい。私の生まれる五年前に祖母は亡くなったが、そういう話を聞いて、何も知らないのになんとなく寂しいような嬉しいような気持ちになったものだ。

私が生まれてほどなく、祖父は他界した。通夜の席で伯父たちは、祖父をどこの墓に入れ

るか、大阪なのか済州島なのか、祖母と同じ墓に入れるのか、いやあの二人はあんなに仲が悪かったのだから同じ墓に入れてはいけない、と言い争い、祖父の霊前で殴り合ったらしい。それを見ていた母の父は、えらいところに娘を嫁にやってしまった、と思ったらしい。

私がまだ三歳かそこらの頃、その親戚たちがどういうわけか、京都・嵐山で花見をした。そして例によって殴り合いになった。彼らは最終的にはビール瓶だか一升瓶だかで殴り合い、見かねた周囲の人が警察に通報した。やってきた警察官は、伯母（伯父の妻）たちに「兄弟喧嘩やからほっといて」と言われて、特に何もできずに立ち去ったらしい。ちなみに、私はそのときにみんなの弁当の中から、好物のハンバーグだけ取り出して食べながら「けんかしたらいけないんだよー」と言っていたそうだ。

この本では、こういう「面白い」人たちが、いつどうやって、なぜ大阪にやってきて、そのあとどうやって生きてきたのかを書いていく。いわゆる家族史と呼ばれるものだ。

登場人物は私の伯父二名と伯母二名。年齢順に、李延奎（イヨンギュ）（一九二五年生まれ、二〇一一年死去。見た感じは小柄で優しそうで笑顔のかわいいおじいちゃん）・朴貞姫（パクチョンヒ）（一九三五年生まれ。李延奎の妻で私の父の次姉。マシンガントークが得意で強烈な存在感のある女性）・朴誠奎（パクソンギュ）（一九三八年生まれ、二〇一一年死去。見た感じは極道の人っぽいが好物は餡子（あんこ））・朴俊子（ぱくとしこ）（一九四四年生まれ。見た感じは大阪のおばちゃんとしても派手なほう）。

彼らは皆、一九四八年に済州四・三事件と呼ばれる事件が起こったあと、再び大阪へ移住

した。それから七〇年近く、彼らは大阪で働き、結婚し、子どもを育て、何人かはすでに他界した。祖母だけが死ぬ前に済州に戻り、そこで亡くなった。

彼らのこのような来歴を、私は何も知らなかった。昔から、自分の親族の過去を聞いてみたい気持ちはあった。けれども私は、何を聞くでもなく調べるでもなく、ただ漠然と「一九四五年までのどこかの時点で日本に来たんだろう」と思っていた。

ところが、高校二年生のとき、貞姫伯母さんが何かの拍子に「あのときは海で船が沈んで大変だった」と言い出したことがあった。そのときに私は初めて、私の親族がどうやら、太平洋戦争後に一度は済州島に戻ったことを知った。

けれども、なぜ？　なぜまた日本へ戻ってきたのだろうか？　そのときに、伯母さんにこの話を聞かなければならないと思った。と思ったのだが、高校時代は部活と受験勉強で消え、大学に入ったら自分のことや恋愛や友人やバイトや授業（ほとんど出ていなかったけれども）で頭がいっぱいになって、伯母さんの話などすっかり忘れていた。

学部生のとき、社会調査の授業で、「誰でもいいから生活史を聞き取ってくるように」という課題が出された。「生活史」という言葉を聞いたのは、その授業が初めてだった。生活史とは、個人史とも言える。そのとき、いい機会だから伯母に話を聞いてみようと思った。きっと面白い話が出てくるに違いない、もしかしたら卒業論文も余裕で書けるんじゃない？と。

しかし、それは大きな間違いだった。そのあと私は困ったり悩んだり調べたり、研究会で

報告して批判されたり、「私、向いてないんじゃないかなー」とつぶやいて、うしろから教官に「どっちでもいいから、早く修正した論文を出しなさい」と突っ込まれたりした。

そうしてだいぶ回り道をして、ようやくあのときに始めたことを本として書いてみようと思っている。それを私の知らない人たちにも読んでもらえたら、嬉しいような恥ずかしいような気がする。

伯父の一人（東奎（トンギュ）伯父さん。五人いる伯父の四番目）が、かつて私に「末は博士か大臣か、っていうけど、朝鮮人は大臣にはなられへん」と言ったことがある。学校の成績の話をしたときのことだったと思う。自分で言うのもなんだが、私は同世代の親戚の中では一番、勉強ができた。伯母やいとこから「勉強ができるのに、女の子だなんてかわいそう」と言われたこともある。日本社会で育った女であれば、学校生活のかなり早い時点で、勉強を頑張るか愛され女子を目指すか決めなければならない。私には最初から、後者の選択肢などなかった。

いまにして思うと、伯父のあの発言は諦念を表したものだったのだろう。お前が学校で成績がよくても、政治を動かす人間にはなれないのだ、自分たちが生きているこの社会に変革をもたらすわけではないのだ、と。しかし当時の私が思ったのは「ふーん、じゃあ博士になろう」ということだった。

いまの日本がこのままであるかぎり、私は大臣にはなれないだろう。しかし、博士にはな

れた。伯父の発言を聞いたとき、私は当然、自分は大臣にはなれないだろうと思ったが、同時に当然、自分は博士にはなれるだろうと思った。

どんなに金持ちになろうとも、どんなに「偉い人たち」と知り合いになろうとも、私が朝鮮人で、しかも女であるかぎり、日本では大臣になれない。しかし金持ちでなくとも、誰の家族でどんな人々と一緒に過ごしていようとも、博士にならなれる。

私が初めてインタビューした相手は、誠奎（ソンギュ）伯父さんだった。私はかつて、伯父さんにひどく泣かされたことがある。それ以後、誠奎伯父さんと会うときはいつも緊張していた。年に数回会うだけの、常に無愛想な姪を、伯父がどう思っていたのかはわからない。

それから一〇年以上経って、誠奎伯父さんに、大学院に進学することを伝えた。すると彼はそもそも大学院とはなんなのか、そこに行ってどうするのかと訊いた。私は「大学に行ったあとでさらに勉強するところです」「そこに行ったら博士になります」と答えた。すると伯父さんは「それでどうすんねん」と尋ねた。私は「家（チベ）の歴史を書きます」と答えた。

けれども、私はそんなものが書けるとは思っていなかった。彼もそれがなんなのか、どういうものなのか、皆目見当もつかなかっただろう。伯父さんはむすっとした表情で「そんなもん誰も読まへんわ」と吐き捨てて、一万円くれた。私はやっぱりそのときも緊張していて、きちんとお礼を言えたのかどうか、よく覚えていない。帰り道で父に「沙羅、今日お前の話聞いて、兄ちゃん、めっちゃ喜んどったなぁ！」と言われて初めて、伯父が喜んでくれ

たらしいことを知った。

大学院に進学したあと「お前はどないして食っていくんや」と尋ねられたことがある。私が答えられずにいたら、父が「こいつ姜尚中（カンサンジュン）みたいになるんやって」と突然言い出した。私はあわてて「何言うてんの！　そんなんいっぺんも思たこともないし！」と言ったのだけれども、誰も私の話を聞かず、へえ姜尚中か、と納得されてしまった。大学院なんてものの存在を知らない彼らでも、姜尚中は知っていた。在日コリアンであるとわかる有名人は、彼らにとってヒーローだった。

大学院に進学して五年後、私は博士号を取得した。専門は社会学だ。けれども、結局まだ「家（チベ）の歴史」を書けていない。それは私にとって、歴史を書くとは具体的に何に目をつけどうすることなのか、わからないままだからだ。

それでも、私は伯父との約束を果たさなければならない。いったん啖呵（たんか）を切ってしまったのだから、書いてみせなければならない。歴史の書き方はまだわからない。けれども、社会学的であるとはどのようなことなのかについては、ほんの少しわかってきたような気がする。私たちが毎日当たり前に生きているこの社会が、どんな規則や知識や思い込みによって成り立っているのかを示せれば、それをもって社会学的と言えるのではないか。

だからこれから、済州と大阪との間を行ったり来たりしていた「面白い」人々の口述史を書いていこうと思う。それは、歴史であると同時に、たぶん社会学的でもあるはずだ。